

ゼパニヤ書 要約付き

ゼパニヤは南ユダ王国 の最後の何十年かを生きました

それはヨシヤ王が国内の偶像を 取り除き

神殿を修理してイスラエルの神 だけを礼拝し

大改革を行おうとしていた時代 でした

しかしイスラエルはあまりにも 墮落しきっていました

偶像礼拝は民の生活の中にすっかり 定着していたのです

ヨシヤ王は頑固さのゆえに戦場 で死を遂げ

エルサレムとバビロンの対立は 厳しくなっていました

しかしゼパニヤはこれらのこと すべてを予見していました

彼は何年もエルサレムの指導者たち に警告を発して

この短い預言書はそれを要約した 詩を集めたものです

本書は3つのセクションから成って います

最初のセクションは 神の裁きがユダとエルサレムに

下る日のことに焦点を当てています 2つ目は他の国々と

エルサレムに再び下る神の裁き についてそして3つめは

国々とエルサレムへの裁きの後 に残された希望について述べて

います

最初のセクションは創造の過程 に逆行するように

神が善いものとして造られた秩序 ある世界が

無秩序で暗く混沌とした 人の住めない世界になるという

衝撃的な記述で始まります さらに読んでいくとこれらの強烈

な詩は エルサレムがどのような終焉を

迎えるかを描いているものだ ということがわかります

この街でカナンの神々への礼拝 に加担していたものは

すべて滅ぼされます不正に手を 染めていた指導者たちも

詐欺のような貸し借りが行われて いた経済の中心地も

エルサレムの城壁と共にすべて 崩れ去るのです

ゼパニヤはこれから起こること つまり巨大な軍隊が

エルサレムを攻略しにやってくる という事実の重要性を示すために

これらのことを黙示的なイメージ で表現します

ここで興味深いのは神が裁きを 下すために用いるのが

どの国の軍隊なのか書かれていない 点です

ミカ書とハバクク書から それがバビロンだということは

わかりますが ゼパニヤはその名を書いてはい

ません それは街を栄えさせるのも滅ぼ

すのも神だ ということに焦点を当てたいから
でした そしてその点こそがゼパニヤに
希望を与えていたのです エルサレム全体が滅ぼされる運命
をまぬがれることはできません が一つ目のセクションの最後の
詩で ゼパニヤは主を求める者たちに
呼びかけ 彼らこそ忠実な残された民であり
悔い改めるなら滅ぼされない と言っています
2つ目のセクションでゼパニヤは 話題をユダの近隣諸国に広げます
ペリシテ人モアブ人アンモン人 アッシリア人たちを
その墮落と暴力と傲慢さのゆえに 非難し
彼らもまたバビロンに滅ぼされる だろうと予告します
そして衝撃的なのは最後に非難 されているのが
エルサレムに住むイスラエル人 たちだということです
イスラエルの指導者や預言者や 祭司たちは暴力的で
墮落しきっていて神から遠く離 れているので
神は彼らをもはやご自分の民と 見なしていないのです
このセクションは神の最後の決断 で締めくくられています
神はエルサレムを含めてこれら の国々を集め
そこにご自分の燃える怒りを注 がれるというのです
神の正義は燃え上がる火となり 地上の悪をすっかり焼き尽くして
しまいます しかしこの書の最後の部分につながる
次の一行には驚かされます この神の裁きの焼き尽くす火は
人々を滅ぼすためのものではなく
エルサレムも含め国々をきよめる ためのものだということです
このセクションは神が癒やしをも たらし
反逆的な国々を一つの家族に生まれ 変わらせ
きよめられた彼らは悪から立ち 返り
神を呼び求めるようになるという 神の言葉から始まります
このイメージは創世記 12 章にある 神が国々をエルサレムとともに
祝福するという アブラハムへの約束が成就した
ことを示しています ゼパニヤ書は
エルサレムが国々の中心に返り 咲くということに
焦点を当てて終わっています 神はその回復した街に臨在し神の
あわれみによって謙遜にされ 造り変えられた忠実な残りの民
に喜び歌えと命じています そしてこの輝かしい場面でゼパニ
ヤは 神ご自身が歌いたがっている詩人

だと言うのです あなたの神はあなたと共に住み
あなたを喜び歌われると この書の最後の詩は見捨てられて
いた者 貧しい者 損なわれていた者たち
が神の家族として集められ 栄誉ある者とされる様子を描いて
終わっています ゼパニヤ書は短い書ですがほか
のどの預言書にも勝って 神の正義と愛の姿を強烈なイメージ
で描いています 神の正義とは人間の悪と暴力に
さらされている世界を救い出し 守ろうとする情熱のことなのです
人間がお互いに対してまた世界 に対して行う非道なことを
神は決して見過ごしません けれども神はその愛のゆえに世界を
回復し 人間が安心と平和のうちに栄える
ことができる場所とするために ご自身の正義を行使されるのです
こうしてゼパニヤは読者に 神の正義と神の愛という二つの
性質を結び付けて理解させます そしてこの二つが合わさって将来
の希望をもたらすのだ ということを伝えているのです
これがゼパニヤ書です

要約

「ゼパニヤ書」は、南ユダ王国の終末期に生きた預言者ゼパニヤによって書かれた書です。この書は、ヨシヤ王の治世下で行われた宗教改革の時代に位置しており、国内の偶像崇拝を取り除き、神殿を修復し、イスラエルの神を崇拝することを目指していました。しかし、イスラエルは依然として墮落し、偶像崇拝が広がっていました。

ゼパニヤは、エルサレムとバビロンの対立や、国内の腐敗、指導者たちの墮落、経済の不正などを予見していました。彼はエルサレムの指導者たちに警告を発し、その内容を要約した詩を書きました。

この書は3つのセクションから成り立っています。最初のセクションは、神の裁きがユダとエルサレムに下る日に焦点を当てています。2つ目のセクションでは、他の国々とエルサレムに下る神の裁きについて語られています。そして3つ目のセクションでは、裁きの後に残された希望について語られています。

ゼパニヤ書は、神の裁きによってエルサレムと他の国々が影響を受けること、しかし最終的に神の正義と愛によって回復されることを描いています。エルサレムは滅びる運命にあるものの、忠実な者たちは神を求めることによって救われる道が示されています。また、ユダの近隣諸国も同様の裁きに直面するとされていますが、神の癒しと変容によって希望がもたらされます。

ゼパニヤ書は、神の正義と愛が結びついて、世界を救い出し、回復させる情熱を示しています。この書は、人間の墮落と暴力に対して神が介入し、世界を平和で満たすために自身の正義を行使することを説いています。将来の希望は、神の正義と愛の融合によってもたらされると伝えています。